

15	受験番号
中	

国語 その一（七枚のうち）

次の□・□は、いずれも『和の思想』という文章の一部です。これらを読んであとの質問に答えなさい。

□ この国の人々ははるかな昔から自分のことを「わ」と呼んできた。ただ、それを書き記す文字がなかった。中国から漢字が伝わる以前のことである。これは今でも「われ」「わたくし」「わたし」という形で残っている。

□ 日本がやがて中国の王朝と交渉するようになったとき、日本の使節団は自分たちのことを「わ」と呼んだのだろう。中国側の官僚たちはこれをおもしろがって「わ」に倭という漢字を当てて、この国を倭国、この国の人を倭人と呼ぶようになった。倭という字は人に委ねると書く。身を低くして相手に従うという意味である。中国文明を築いた漢民族は黄河の流れる世界の中心に住む自分たちこそ、もっとも優れた民族であるという誇りをもっていた。そこで周辺の国々をみな蔑んでその国名に侮蔑的な漢字を当てた。倭国も倭人もそうした蔑称である。

ところが、あるとき、この国の誰かが倭国の倭を和と改めた。この人物が天才的であったのは和は倭と同じ音でありながら、倭とはまったく違う誇り高い意味の漢字だからである。和の左側の禾は軍門に立てるヒョウシキ、右の口は誓いの文書を入れる箱をさしている。つまり、和は敵対するもの同士が和議を結ぶという意味になる。

この人物が天才的であったもうひとつの理由は、和という字はこの国の文化の特徴をたった一字で表わしているからである。というのは、この国の生活と文化の根底には互いに対立するもの、相容れないものを和解させ、調和させる力が働いているのだが、この字はその力を暗示しているからである。

和という言葉は本来、この互いに対立するものを調和させるという意味だった。そして、明治時代に国をあげて近代化という名の西洋化にとりかかるまで、長い間、この意味で使われてきた。和という字を「やわらぐ」「なごむ」「あえる」とも読むのはそのためである。「やわらぐ」とは互いの敵対心が解消すること。「なごむ」とは対立するもの同士が仲良くなること。「あえる」とは白和え、胡麻和えのように料理をよく使う言葉だが、異なるものを混ぜ合わせてなじませること。

この国の歌を昔から和歌というのは、もともとは中国の漢詩に対して、和の国の歌、和の歌、自分たちの歌という意味だった。しかし、和歌の和は自分という古い意味を響かせながらも、そこには対立するものを和ませるといってもっと大きな別の意味をもっていた。九〇〇年代の初めに編纂された『古今和歌集』の序に、編纂の中心にいた紀貫之は次のように書いている。

*やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

受験番号

15
中

国語 その二（七枚のうち）

「男女の中をも和らげ」というところに和の字が見えるが、それだけが和なのではない。「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むる」というくんだり全体が和歌の和の働きである。和とは天地、鬼神、男女、武士のように互いに異質なものを、対立するもの、荒々しいものを「力をも入れずして……動かし、……あはれと思はせ、……和らげ、……慰むる」、こうした働きをいうのである。これが本来の和の姿だった。

明治時代になって、西洋化が進むと江戸時代以前の日本の文化とその産物をさして和と呼ぶようになった。着物を和服といい、畳の間を和室というのがそれである。この新しい意味の和は進んだ西洋に対して遅れた日本という卑下の意味を含んでいた。

歴史を振り返ると、はるか昔、中国の人々が貢物を捧げにきた日本人をからかいと侮蔑をこめて倭と呼んだ。それをある天才が一度は和という誇り高い言葉に書き替えたにもかかわらず、その千年後、皮肉なことに今度は日本人みずから自分たちの築いてきた文化を和と呼んで卑下しはじめたことになる。この新しい意味の和は近代化が進むにつれて徐々に幅を利かせ、今や本来の和は忘れられようとしている。

身のまわりを見わたせば、近代になってから私たちが和と呼んできたものはみな生活の隅っこに押しこめられてしまっている。現代の日本人はふだん洋服を着て、洋風の食事をし、洋風の家に住んでいる。ふつうの人にとって和服は特別のときに引っぱり出して着るだけである。和食といえば、すぐ鮓や天ぶらを思い浮かべるが、鮓にしても天ぶらにしても、多くのの人にとって、むしろ、ときどき食べにゆくものにはぎない。和室はどうかといえば、一戸建てにしるマンションにしる一室でも畳の間があればいいほうである。こうして片隅に押しこめられ、ふつうの日本人の生活からかけ離れてしまったものが和であるなら、私たち日本人はずいぶんあわれな人々であるといわなければならない。

ところが、この国には太古の昔から異質なものと対立するものを調和させるという、いわば*ダイナミックな運動体としての和があった。この本来の和からすれば、このような現代の生活の片隅に追いやられてしまっている和服や和食や和室などはほんとうの和とはいえない。たしかにそれは本来の和が生み出した産物にはちがいないが、不幸なことに近代以降、固定され、*偶像とあがめられた和の化石であり、残骸にすぎないということになる。

では、異質なものを、対立するものを調和させるといふ本来の和は現代において消滅してしまったか。決してそんなことはない。それは今も私たちの生活や文化の中に脈々と生きつづけているのだが、私たちは和の残骸を懐かしがってばかりいるものだから、本来の和が目のあるのに気づかないだけなのだ。近代化された西洋風のマンションの中に一室だけ残された畳の間。ふつうその畳の間だけを和の空間と呼ぶのだが、本来の和はそれとは別のものである。むしろ西洋化された住宅の中に畳の間が何の違和感もなく存在していること、これこそ本来の和の姿である。同じようにパーティで洋服の中に和服の人が立ち交じっていようと何の不思議もない。逆に結婚披露宴で和服の中に洋服の人がいても違和感はない。あるいは、西洋風の料理の中に日本料理が一皿あっても何の問題もない。白人の中に日本人がいても、あるいは逆に有色人の中に白人がいても少しも目障りではない。

畳の間や和服や和食そのものが和なのではなく、こうした異質のものなごやかな共存こそが、この国で古くから和と呼ばれてきたものなのである。少し見方を変えるだけで、この国の生活や文化の中で今も

受験番号

15
中

国語 その三（七枚のうち）

活発に働く本来の和が次々にみえてくる。

□

日本には昔から生け花がある。今では海外でもイケバナという日本語がそのまま通じるが、英語にしてフラワーアレンジメントということもある。しかし、日本の生け花と外国でフラワーアレンジメントと呼ばれるものは、どこか違うのではないかと前々から思っていた。そこで、いつだったか、福島光加という草月流の花道家に会ったとき、

「生け花とフラワーアレンジメントはどう違うのですか」と尋ねてみた。

福島は日本在住の多くの外国人に生け花を教えているだけでなく、しばしば外国に出かけて指導もしている人なので、きつとこういうことに詳しいだろうと思っただのだ。すると、たちどころに、

「フラワーアレンジメントは花によって空間を埋めようとするのですが、生け花は花によって空間を生かそうとするのです」という明快な答えが返ってきた。

そのとき、この答えは生け花とフラワーアレンジメントの違いをいっているだけでなく、日本の文化と西洋の文化の違いにも触れているのではないかと思っただけでなく、今でも覚えている。

福島は「花のライブ」というショーを開くことがあって、ときどき妻と見に出かけることがある。ふつう生け花といえ、すでに花瓶に生けて飾ってある花を眺めるものだが、このライブでは目の前のステージで花を生けて見せてくれるので、花がどのようにして生けられるのか、目の当たりにすることができて門外漢の私などにはおもしろい。

ライブでは二、三人の弟子もステージに上がって生けることがある。それを見ていて師匠と弟子はこどもも違うものかと思っただけであった。というのは、師匠の福島の生ける花はどれも堂々として大きく見えるのに、弟子が生けた花は、たしかに上手にちがいないのだが、どこか小ぢんまりしてしまう。なぜ、師匠と弟子でこんな違いが出るのか。それはひとえに花というもののもつ偶然の要素をかけがえのないものとしてとだけ生かしているかどうにかかっている。

一口に松、一口に桜といっても一枝ごとに枝ぶりや花や葉のつき方、色合いがみな違っていて同じものなどひとつもない。もちろん本番の前に花材を調べたり、リハーサルをしたりするのだから、ステージに上がって実際、その花を目の前にすると、リハーサルでは気づかなかったところが急に現れてきたり、あるいは、同じ枝かと思うほどまったく違うものに見えるたりすることもあるにちがいない。

弟子はステージの上でこの*変幻する花を手にしたとき、もちろん緊張もあるだろうし、師匠から教わったいろいろな約束事に縛られることもあるだろうが、そのため花のそのときの姿が見えない。弟子が自分では見えていると思っている花はリハーサルするときに見た花であって、もはやそこにある花ではない。そうなる、目の前にある花の姿がほんとうは見えていないわけだから、花を生かそうとしても生かすことなどできないわけだ。その結果、生けられた花はどこかぎこちなく型にはめられているような窮屈な感じがし、小ぢんまりしたものになってしまう。

一方、福島の生け方を眺めていると、片時もとどまらない雲や水のように刻々と変幻する花をどう生かすか、どこをどう切り、どこにどう生ければ、その花がもっとも生きるかということだけを考えている。百人を超す観衆の目の前で自分の手にある一本の枝、一輪の花の今の姿を一瞬にして見極めると、その

受験番号

15
中

国語 その四（七枚のうち）

花の姿に応じてまさに臨機応変に鉢を入れ、生けてゆく。生け花の難しい約束事などもはや眼中になく、すべてを忘れて花のそのときの姿を生かすことに夢中になっている。

ときには背丈より高い松や桜の枝を手にし、見上げ、まるで自分のいちばん好きな姿になりなさいと呼びかけるかのように揺らし、枝を広げてやる。ライブはコウソウビルの林立する東京の真ん中で開かれていたのだが、その松の枝のあつた空や桜の花を吹いていた風を感じているようでもある。まるで童女が広々とした野山で花と遊んでいるような自由自在であって観客の目にはそれがすがすがしいものに映る。

こうして生けられた花は枝の一本一本、花の一輪一輪がみなこのびのびとしているばかりではなく、花の生けられた空間、東京のとあるホールの無機質な空間が、どこからか風が通い、命を宿したかのようにいきいきと輝きはじめるのだ。

生け花は花を生かすと書くのだから花を生かすのはいうまでもないが、「フラワーアレンジメントとどこが違うのか」という私の疑問に対する「花によって空間を生かす」という即答は花を生かすことによつて空間を生かし、その花によつて生かされた空間が今度は逆に花を生かすということなのだろう。

このように日本の生け花では空間は花によって生かすべきものであって、フラワーアレンジメントのように花で埋め尽くすものではない。花とそのまわりの空間は敵対するものではなく、互いに引き立てあうものとしてある。その花の生けられる空間とはいうまでもなく私たちが呼吸をし、生活をしている空間である。それはそのまま、間といいかえていいものなのだ。

日本語の間という言葉にはいくつかの意味がある。まずひとつは空間的な間である。「すき間」「間取り」というときの間であるが、基本的には物と物のあいだの何もない空間のことだ。絵画で何も描かれていない部分のことを余白というが、これも空間的な間である。

日本の家は本来、床と柱とそれをおおう屋根でできていて、壁というものが無い。これは部屋を細かく区分けし、壁で仕切り、そのうえ、鍵のかかる扉でミツペイしてしまう西洋の家とは異なる。西洋の個人主義はこのような個室で組み立てられた家に住んできたからこそ生まれたというのはよくわかる話である。

それでは、壁や扉で仕切る代わりに日本の家はどうするかというと、障子や襖や戸を立てる。「源氏物語絵巻」などに描かれた王朝時代の宮廷や貴族たちの屋敷を見ると、その室内は板戸や藪戸、襖や几帳などさまざまな間仕切りの建具で仕切られてはいるものの、いたるところすき間だらけである。西洋のジュウコウな石や煉瓦や木の壁に比べると、何という軽やかさ、はかなさだろうか。

しかも、このような建具はすべて季節のめぐりとともに入れたりはずしたりできる。冬になれば寒さを防ぐために立て、夏になれば涼を得るためにとりはずす。それだけでなく、住人の必要に応じて、ふだんは座敷、次の間、居間と分けて使っている、いざ、大勢の客を迎えて祝宴を開くという段になると、すべてをつないで大広間にすることもできる。このように日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在につないだり切ったりして暮らしてきた。

次に時間的な間がある。「間がある」「間を置く」というように、こちらは何もない時間のことである。芝居や音楽では声や音のしない沈黙の時間のことを間という。

バッハにしてもモーツァルトにしても西洋のクラシック音楽は次から次に生まれては消えてゆくさまざま

15	受験番号
中	

国語 その五（七枚のうち）

まな音によつて埋め尽くされている。たとえば、モーツアルトの「交響曲二十五番」などを聞いていると、息を継ぐ暇もなく、ときには息苦しい。モーツアルトは沈黙を恐れ、音楽家である以上、一瞬たりとも音のない時間を許すまいとする衝動に駆られているかのように見える。

それにひきかえ、日本古来の音曲は琴であれ笛であれ鼓であれ、音の絶え間というものがいたるところにあつて長閑なものだ。その音の絶え間では松林を吹く風の音がふとよぎることもあれば、谷川のせせらぎが聞こえてくることもあるだろう。ときには、この絶え間があまりにも長すぎて、一曲終わってしまったかと思つていると、やおら次の節がはじまるということも珍しくない。そんなふうには、いくつもの絶え間に断ち切られていても日本の音曲は成り立つてしまう。

空間的、時間的な間のほかに、人やものごととのあいだにとる心理的な間というものもある。誰でも自分以外の人のあいだに、たとえ相手が夫婦や家族や友人であつても長短さまざまな心理的な距離、間をとつて暮らしている。このような心理的な間があつてはじめて日々の暮らしを円滑に運ぶことができる。こうして日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。それを上手に使えば「間に合う」「間がいい」ということになり、逆に使い方を誤れば「間違い」、間に締まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け」になってしまう。間の使い方はこの国のもつとも基本的な掟であつて、日本文化はまさに間の文化といふことができるだろう。

では、この間は日本人の生活や文化の中でのどのような働きをしているのだろうか。そのもつとも重要な働きは異質なもの同士の間を対立をやわらげ、調和させ、共存させること、つまり、和を実現させることである。早い話、互いに意見の異なる二人を狭い部屋に押しこめておけば喧嘩になるだろう。しかし、二人のあいだに十分な間をとつてやれば、互いに共存できるはずだ。狭い通路に一度に大勢の人々が殺到すれば、たちまち身動きがとれなくなつてパニックに陥つてしまふが、一人ずつ間遠に通してやれば何の問題も起こらない。

和とは異質のもの同士が調和し、共存することだつた。この和が誕生するためにはならない土台が間なのである。和はこの間があつてはじめて成り立つということになる。

（長谷川權の文による）

（注） *やまとうたは、

く慰むるは歌なり。……「和歌は、人の心を種として、多くの言葉となつたものである。世の中に生きている人は、関わり合う事が多いので、心に思うことを、見るものや聞くものに託して、歌にするのである。花に鳴く鶯や水に住む蛙の声を聞くと、すべて命あるものは、歌を詠まないことなどあるだろうか。力を入れないで天地を動かし、目に見えない鬼神を感動させ、男女の仲を和らげて、荒々しい武士の心をも慰めるのは、歌である。」

*ダイナミック……………力強く、生き生きとしているさま。

*偶像……………ここでは「人々が由来や根拠のわからぬまま、ただあこがれる対象」の意味。

*変幻……………姿かたちや状態がすばやく変わることに。

15	受験番号
中	

国語 その六（七枚のうち）

問一 「和は倭と同じ音でありながら、倭とはまったく違う誇り高い意味の漢字」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「和」を用いた次の四字熟語について、空欄部分にあてはまる漢字一字を記しなさい。

和雷同

和魂洋

和洋

衷

(2) 「倭」と「和」は、どのような意味の漢字ですか。文中よりそれぞれ十一字と十四字で抜き出しな

さい。

「倭」

という意味

「和」

という意味

(3) 「和」は「倭」と比べて、どうして「誇り高い意味の漢字」だといえるのですか、説明しなさい。

問二 「この新しい意味の和は近代化が進むにつれて徐々に幅を利かせ、今や本来の和は忘れられようとしている」とあるが、「この新しい意味の和」とは、どのようなものですか、説明しなさい。

問三 「それはひとえに花というもののもつ偶然の要素をかけがえのないものとしてどれだけ生かしているかどうかにかかっている」とあるが、「花というもののもつ偶然の要素をかけがえのないものとして」生かすとは、どういうことですか、説明しなさい。

